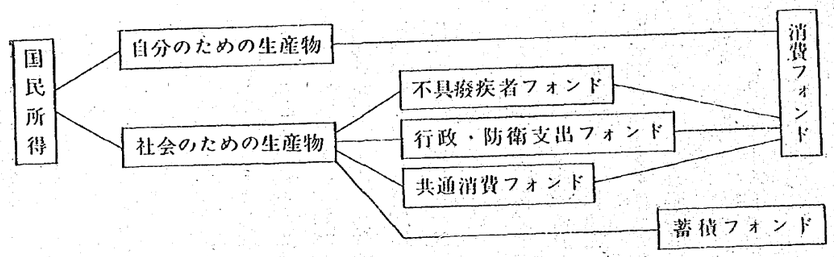
慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	杉原四郎著 ミルとマルクス
Sub Title	
Author	井村, 喜代子
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1957
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.50, No.7 (1957. 7) ,p.666(114)- 669(117)
JaLC DOI	10.14991/001.19570701-0114
Abstract	
Notes	書評及び紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19570701-0114

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.



の適用は余りに単純であり、重工業優先についても説得的でないし、生産的国民所得の概念も公式的な憾みがある。しかしこれらの重要な問題については、近くまとめて論じたいと思うので、ここでは省略しておき、二・三の細かい点を挙げてみよう。

労働力の再生産には、労務員の数の増大・資質の向上も必要であるのに触れられていない。第六章の生活水準の向上では、ひたすら統計によって外国との比較などが述べられているにすぎない。更に彼が用いる「均衡」「弾力性」の概念が明確でない。「つりあい」とはどのようなものであろうか。彼の重工業優先の根拠は過去のソビエトの発展がそうであったからという所におかれているようで、その法則の絶対的意義が述べられていない。彼は農業生産物が二つの部門に分けられることを示しながら建設部門生産物を忘れている。また彼は、マルクスが資本論第一巻で、社会主義では剰余労働と必要労働とに分けられないと述べているのを引用しているが、第三巻では分離が「一般に常に本質的である」と述べていることを無視するのであろうか。（加藤　寛）

杉原四郎著

『ミルとマルクス』

資本主義体制の矛盾が労働者階級の窮乏・労資の階級対立を通じて鋭く表面化してきた一九世紀中葉、ともにこの「現実を批判的・前進的に方向づけようとする思想家」としてあらわれたマルクスとミルが、いかにして、また何故に、非常に異なる思想体系をきづきあげ、全く異なる方向に現実打開の道をもとめていったのか――この問題意識が綿密で体系的な研究のなかに一貫して、しかも着実につらぬかれているため、本書はまことにみごとな迫力あるものとなっている。そこには「二つの経済学の対決」という最近の分析にとかくみられがちな皮相性や安易さはすこしも感じられない。

× × ×

本書は第一部「マルクス経済学の基本性格」と、第二部「J・S・ミルにおける社会主義の問題」とからなっている。

第一部。まずマルクス経済学の基本的視角が一応あたえられた段階として、一八四四年エンゲルス『経済学批判大綱』（第一章）と、

同年マルクス『経済学・哲学手稿』（第二章）がとりあげられる。

第一章では渡英前すでに共産主義的思想への一歩をふみだしていたエンゲルスが、マンチェスターで資本主義のなまなましい現実を身ぢかに観察することによって、「経済的事実」（傍点引用者・以下同様）が「近代世界においては、決定的な歴史的力であり」、「階級対立のおこる基盤である」（エンゲルス）ことを痛切に自覚し、自由主義経済学の批判を通じて私有財産制における競争の不道徳性と非人間性、競争の発展の歴史的必然性を明確にし、それを基軸として経済的運動の諸帰結を追求していった視角と論理がえがきだされる。

第二章ではマルクスの人間の自己疎外の認識、人間解放というヒューマニズムが、いわゆる「三つの源泉の批判」の融合によって、疎外をうみだす経済的諸関係――私有財産制における労働――の研究にしぼられ、「労働の自己疎外とその止揚」という認識に結晶していく点が『手稿』において――「最も原初的形態」でではあるが――解明される。

こうして前半では経済分析の基本的視角が独自的な歴史観・人間観をもとにして、「経済的事実」の鋭い観察を媒介としつつうみだされていった過程がおさえられるが、しかし他面ではかかる基本的認識から経済学＝『資本論』体系が確立されるためには二十年余の「はるかに遠い刻苦にみちた研究過程」が必要であったこと、またこの経済学研究によって思想自体がますます確固たるものとなっていったことが強調され、この点が後半のテーマとされる。ここで『手稿』以前と『資本論』段階を、哲学者マルクスと経済学者マルクスというように機械的に対立させたり、あるいは反対に『手稿』のなかに『資本論』の論理を直接的によみとり、経済学確立の苦難とその意義を見失う傾向を批判し、マルクス経済学の形成と特質を思想との関連で把えようとする著者の意欲的立場に注目すべきであろう。

さて後半では四八年革命の敗北後、亡命地ロンドンで再開された経済学の系統的研究の過程で、「疎外された労働」という初期の認識が、商品・価値の分析を基礎として（絶対的）剰余価値論に結実した点――標準労働日をめぐる労資の激しい対立にかんする正しい洞察がこれを可能にした点――（第三章）、この必要労働と剰余労働の概念が『資本論』の基礎範疇」としてもつ意義（第四章前半）が解明される。ただし労働が人間にとって、歴史の発展にとってもつ意義は「もはや単なるマルクス経済学の問題たるにとどまらず、マルクスの人間観ないし世界観にもかかわる問題でもある」（丸は著者の傍点）から、必要労働と剰余労働の概念がひとり「狭義の経済学のみならず広義の経済学の研究に対しても有する決定的重要性」を理解すべきであるとされる（第四章後半）。

以上第一部の構想は、『手稿』→『資本論』をつらぬく基本線を「労働の疎外とその止揚」という認識にもとめ、これこそがマルクス経済学ひいては思想体系の基軸をなしていることを明らかにし、その理論化の過程と理論内容の分析によってマルクス経済学の形成とその基本的性格を思想の成熟との関連で把えようとしたものと理解さ

れる。

×　×　×

第二部はマルクスとの比較を念頭におきつつ、社会主義との対決という点に焦点をしぼり、「一八三〇年頃から擡頭し、四八年革命を劃期とする現代史の基本線との関連において」、ミルの思想体系の特質を浮彫りにしようとする。

ミルの思想的変遷と成熟をあとづけた第一章では、ミルの社会主義論がどこまでも「啓蒙思潮の一九世紀イギリス的一変種」たる哲学的急進主義の拡充であった点、しかしそれは先進国イギリスの相対的安定性にささえられた「イギリス自由主義の伝統的な健康さないししぶとさ」をもっていた点が注目される。

第二章ではミルとマルクスが同じ時代の現実と対決し、ともにイギリス古典学派・ドイツ観念論哲学・フランス社会主義を批判的に研究しつつみずからの体系化をはかりながらも、四八年には『経済学批判』と『共産党宣言』、五九年には『自由論』と『経済学批判』という形で、その差をますます決定的にしていく過程が簡潔・明瞭にえがきだされる。

もっともそこでは力点がマルクスのミル批判の観点の成熟という点におかれているため、ミルの現実対決の過程は精彩をかいているが、これはその過程の特徴を集約的に表現した遺稿『社会主義論』の分析（第三章）でおぎなわれる。すなわち六〇年以降、一方では国際的規模での労働運動の新展開に直面して「憂慮」をふかめるとともに、他方ではイギリス資本主義の繁栄によって改良への「自信」を強めていったミルの現実対応のしかたが、遺稿の二つの特徴――革命的社会主義への「防衛的態度」と「現体制に対するいちじるしい楽観的態度」――の分析を通じて明示される。なおここで遺稿の直後七三年恐慌にはじまる大不況が、ミルの希望をたくした生産協同組合を破滅させ、ミルのいう自由競争の利点を独占化のなかでむなしいものとしていったことを思いあわすべきであろう。

第四章では近代日本におよぼしたミルの影響に言及されるが、ミルのうけいれかたに日本の近代思想形成の特徴が反映されている点で興味ぶかいものがある。

×　×　×

本書からまず考えさせられたのは、経済―ひろくは社会体制にたいする歴史的認識が経済学確立においてもつ意義と、他面経済学による経済機構の分析が体制認識＝体制批判自体を深化し規定づける作用である。これはミルとマルクスが内容的に非常に異なるとはいえ、ともに「単なる職人的科学者ならぬ思想家とよばれるにあたいする人々」であり、彼らの経済学が広大なる思想から分出され、他面では経済学による経済機構の分析が彼らの思想の成熟・体系化を方向づけたからであろう。(注)

第一部ではマルクスを通じて右の関連性が明確に把えられているが、第二部ミルでは十分とは思えない。もっとも第二部はミルの社会主義論が現在なお「革命的社会主義に対抗する諸種の『社会主義』

……にとって有力な一想源」となっているという現代的課題意識から、彼の改良主義的性格の分析に主眼がおかれ、そのかぎりではすぐれた解答があたえられているのではあるが、しかし社会主義の内容が「経済的事実」をいかに分析・批判するかに大きく依拠することを考えれば、たとえ右の課題意識にたっても、第一部のごとく経済学の形成とその基本性格に焦点をしぼる意義は十分あるし、その方が第一部との内容的つながりをもふかめ、マルクスとの対比を一層明確にしたのではないかと思われる。

マルクス主義思想の特質が「労働の発展史のうちに社会の歴史全体を理解する鍵をみとめた」点にあり（『フォイエルバッハ論』）、この独自な労働観が経済学体系の支柱をなすものであったとすれば、ミルにあってはこの点どうだったのか。その差はミルの経済的基礎範疇や経済法則の把握にどう具体化しているのか――資本家の「努力」（その報酬＝利潤）と労働者の「労働」（その報酬＝労賃）との同一視、労働価値論の形骸化、生産法則と分配法則の理解など――。またかかる把握のうえに展開された個々の経済理論がいかなる論理的欠陥をもち、その欠陥が標準労働日の問題、労働階級の窮乏化、周期的恐慌など、現実の経済的矛盾の客観的分析をいかにさまたげたのか。――このように両者の体制認識の差を経済的矛盾の分析の領域にひきいれて、両者の経済理論のもつ客観的正当性という点にまでほりさげて、対決せしめたならば、マルクスが資本主義体制の歴史的認識のうえに経済学を確立したことの意義も、またミルが終生ブルジョア・リベラリストとしての体制批判の域をこえなかった基礎も一層明瞭になったのではなかろうか。

こうしたミル研究は経済学説史研究という観点からも重要な意味をもっている。著者はたとえ「ミルの経済学の個々の分析用具の多くは時代おくれになってしまった（ピグー）としても、その社会哲学はなお死なず」という観点から、前述のようにミル社会主義論分析に「現代的意義」をもとめられたのであるが、しかしはるかに精緻な分析用具をもつと誇るピグー自身のなかに、ミルと非常にちかい生産・分配法則の理解、基本的諸範疇の把握がみいだされることを考えれば、ミル経済学をその後の経済学説のながれのなかで位置づける仕事も現在決じて「意義」なきものではないと思う。むしろ、従来わが国の学説史研究がもっぱらスミス→リカード→マルクスに集中し、ミルにいたるながれをいわゆる俗流化として軽視してきたことが、ミル以後の学説史研究の貧困さをうむにいたったことを現在反省する必要があろう。

ミル研究の第一人者といわれる著者の綿密かつ意欲的な研究に感銘しただけに、本書の領域をこえた希望ものべ、研究の発展を期待したしだいである。

注、なおこの問題をスミスにおいて考えるうえに、内田義彦氏の力作『経済学の生誕』を是非参照されるようすすめたい。

（ミネルヴァ書房、A5判、二六〇頁、三七〇円）（井村喜代子）